了した。上陸地は鹿児島港。

一、米軍捕虜の問題

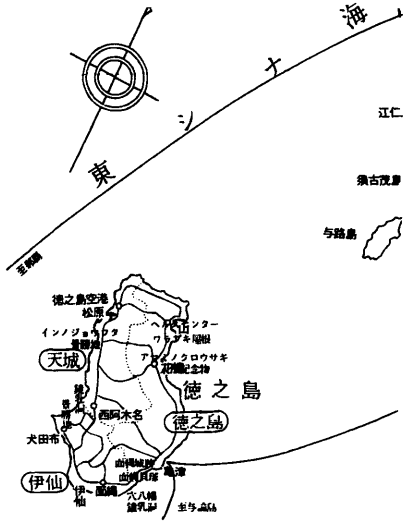
奄美地区で日本軍の対空砲火により撃墜破された米航空機搭乗員は身柄を九州へ送られ、終戦時には二名が抑留されていたが、無事米軍に引渡された。このため奄美地区では石垣島や宮古島とは異なり戦犯問題は起らなかった。

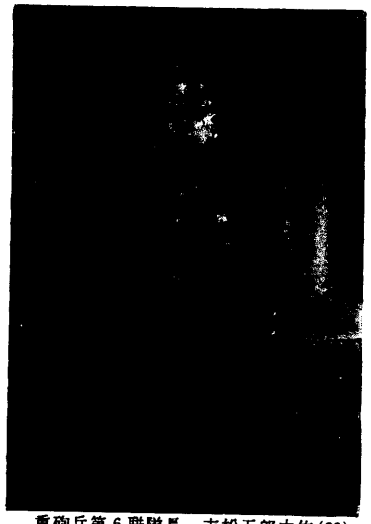
（註）本件については東京在の独立混成第64旅団司令部付大尉伯野俶一、旅団副官大尉篤民雄両氏に照会したが、拠るべき資料乏しく詳細を究めることが出来なかったのでごく大まかな記述に止めた。

独立混成第64師団司令部高級部員

中溝　猛中佐（37）

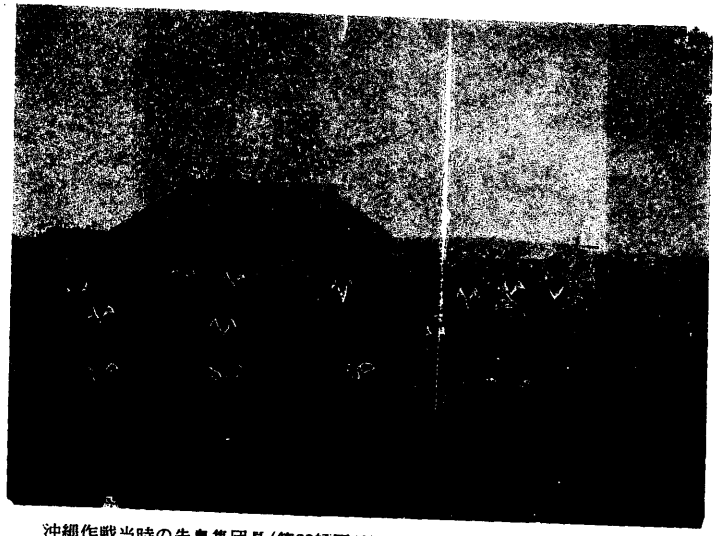
大正14年歩兵少尉、近衛歩兵3聯隊中隊長、南支派遣歩兵第一二四聯隊長、昭和18年中佐、19年7月独立混成第64旅団司令部高級部員、前任の中根中佐は小笠原団参謀、硫黄島で戦死。





重砲兵第6聯隊長　末松五郎中佐（30）

同聯隊は奄美大島要塞重砲兵聯隊が改編されたもの（昭和19年5月）前任は井上二一大佐。復員後昭和33年12月歿。



沖縄作戦当時の先島集団長（第28師団長）　納見敏郎中将（27期・写真真中）

この写真は昭和20年6月頃宮古島野原岳の集団戦闘司令所で撮したもの（前列）左から山砲兵第28聯隊長梶松次郎大佐（28期）、第28師団兵器部長幸田畔達大佐（26期）、同師団参謀長一瀬舜大佐（32期）、独立混成第60旅団長安藤忠一郎少将（21期）、納見集団長、独立混成第59旅団長多賀哲四郎少将（27期）、騎兵第28聯隊長上田雌大佐（26期）、歩兵第3聯隊長怡土軍大佐、歩兵第30聯隊長富沢国松大佐（28期）、（後列）左から師団長専属副官豊島勝美中尉、（一人置いて）輜重兵第28聯隊長宮川正少佐（51期）、師団参謀杉本和朗中佐（42期）、同参謀陸路冨士雄中佐（37期）、工兵第28聯隊長外賀猶一大佐（28期）、師団経理部長三浦信一主計大佐、軍医部長脇田豊軍医大佐、高級副官浜久中佐（39期）、獣医部長代理宮田輝也獣医大尉、独混第59旅団副官小梨貞三大尉（？）、独混第60旅団副官原宿隆大尉（？）

（納見中将主要軍歴）

広島県尾道市出身、明治27年生、陸士27期、大正4年歩兵少尉、シベリヤ事変従軍、教育総監部付、第14師団参謀、教育総監部庶務課長、歩兵第41聯隊長、南支作戦参加、昭和15年8月憲兵司令部本部長、上海憲兵隊司令官、憲兵学校長、台湾憲兵隊司令官、19年6月陸軍中将、20年1月12日第28師団長（先島集団長）、沖縄作戦開始後先島地区の防衛を指導、9月7日南西諸島地区陸軍部隊を代表して降伏調印式に出席、12月1日BC級戦犯指定、同月13日自決、従四位勲2等功4級

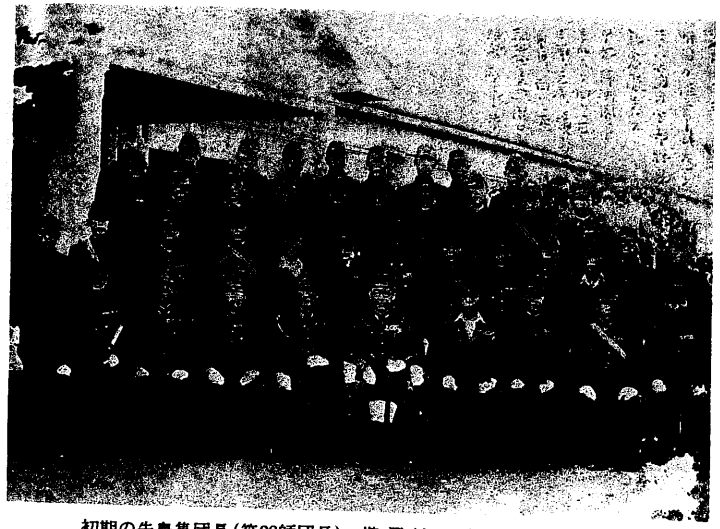
先島群島作戦の概要

宮古地区を重点に兵力配備

昭和十九年二月内南洋に於ける聯合艦隊の大根拠地トラック諸島が米機動部隊の急襲を受け潰滅的打撃を蒙って以来南西諸島一帯は何時なんどき敵の攻撃に曝されるやも測り知れない状況となった。

同年三月南西諸島全域の防衛を任務とする第三十三軍が創設され、五月宮崎少将を長とする先島守備隊が編成されたが、守備隊の骨幹兵力である独立混成第四十五旅団主力が輸送途中、敵潜水艦の雷撃を受け海没（六月二十九日徳之島東方での乗船富山丸沈没事故）その大半が遭難死したため、先島群島の防衛準備は初期に於て蹉跌を来すに至った。この形勢に大本営では急ぎ空白を埋めるべく満洲チチハル在の第二十八師団（師団長備瀬鎮一中将・24期）の宮古島転用を決し、同師団主力は朝鮮釜山経由で海路宮古島に輸送された。これより先、同師団隷下の歩兵第三十六聯隊は師団の隷下を離れて第三十二軍直轄部隊として大東島へ配兵された。越えて八月から九月にかけて満洲編成の独立混成第五十九旅団（旅団長多賀哲四郎少将・27期）並に独立混成第六十旅団（旅団長安藤忠一郎少将・21期）その他多くの配属部隊が宮古島に送り込まれ、先島群島の防衛は緒につくに至った。

これら先島群島所在陸軍部隊を以て先島集団となし、第二十八師団長の指揮下に置かれた。先島集団は宮古群島に主力を、八重山群島に独立混成第四十五旅団（海没後現地召集者を加えて再編成）を基幹とする部隊を配し、総兵力おそそ三萬五千名。外に宮古、石垣両島海軍警備隊（司令



初期の先島集団長(第28師団長)　櫛淵鉦一中将(前列真中)

この写真は昭和19年11月3日明治節の佳辰を記念して撮られたもので場所は司令部の設けられた県立宮古高等女学校々門前（前列）左から師団参謀杉本和朗中佐(42)、同陸路冨士雄中佐(37)、師団軍医部長脇田軍医大佐、師団参謀長福地春男少将(32)、櫛淵師団長、同経理部長三浦信一主計大佐、獣医部長走尾獣医中佐、高級副官浜久中佐(39)、兵器部高級部員上田幸吉少佐（2列目）2人目師団長専属副官堀江道徳大尉、4人目師団次級副官清野秀智少佐、軍医部次級部員山田豊軍医少佐、7人目経理部高級部員角田醇平主計少佐、動員係山田幸治大尉(?)、宮田輝也獣医大尉(外略)　(註)階級は終戦時現在

(櫛淵鉦一中将主要軍歴)

東京都出身、明治23年生、陸士24期、騎兵科出身、海外駐在武官、陸軍省高級副官、昭和13年から2年間第1軍（軍司令官梅津美治郎中将・のちの大将）参謀長として石家荘・大原地区の作戦に参加、16年陸軍中将、名古屋(第3)留守師団長、満州ハルビン在の第28師団長、19年7月戦況急変に伴い師団は第32軍の戦闘序列に編入され、先島群島防衛の任務を付与され宮古島に移動、先島集団長として石垣地区部隊を併せ指揮した。20年1月12日在済口の第34軍司令官に栄転、6月鮮満国境の咸興に司令部を移動、終戦後ソ連で抑留生活を送り27年帰国、39年9月永眠した。正四位勲二等功三級

村尾重二、井上乙彦大佐）が加わり、かなり充実した展開となった（配備図参照）

初期の作戦準備

航空基地設定に全力

先島群島に於ける初期の作戦準備は中央の航空優先方針に従って飛行場設営と航空部隊の作戦協力に重点が置かれ、宮古島に於ては海軍飛行場の外に中、西、東（のち中止）の三個の陸軍飛行場と付属施設の設営、石垣島に於ては海軍飛行場の外に陸軍白保飛行場の建設に全力が傾注され、幾多の困難と悪条件を冒して強行工事の末、十月初旬概成したが、この間およそ二カ月以上も地上作戦準備が放棄され、陣地構築などに少なからず支障を来した。

防衛方針の大綱

宮古地区では攻勢案も

先島群島の防衛方針については十九年秋現地に於て第三十二軍より長参謀長、八原高級参謀指導のもとに現地軍幹部が参集して兵棋演習が行われ、研究の末

(一) 宮古島に於ては持久を主とするも、状況によっては攻勢に出る。

(二) 石垣島に於ては極力持久を旨とする。

の大綱が決まり、この方針に基いて兵力の運用配備が進められた。石垣島は東北部が山岳地帯を形成、守備に適する地形を示しているに反し宮古島は全島平坦、わずかに島のところどころに緩やかな丘陵地帯をみとめるのみで四方から艦砲射撃を受け易く、東北部の一部を除き四囲が上陸可能とされ、攻むるに易く守るに難く、

宮古島地区防禦配備図

軍隊区分

北地区　独立混成第59旅団（司令部位置添道）
歩兵第30聯隊（本部細竹）ほか配属部隊

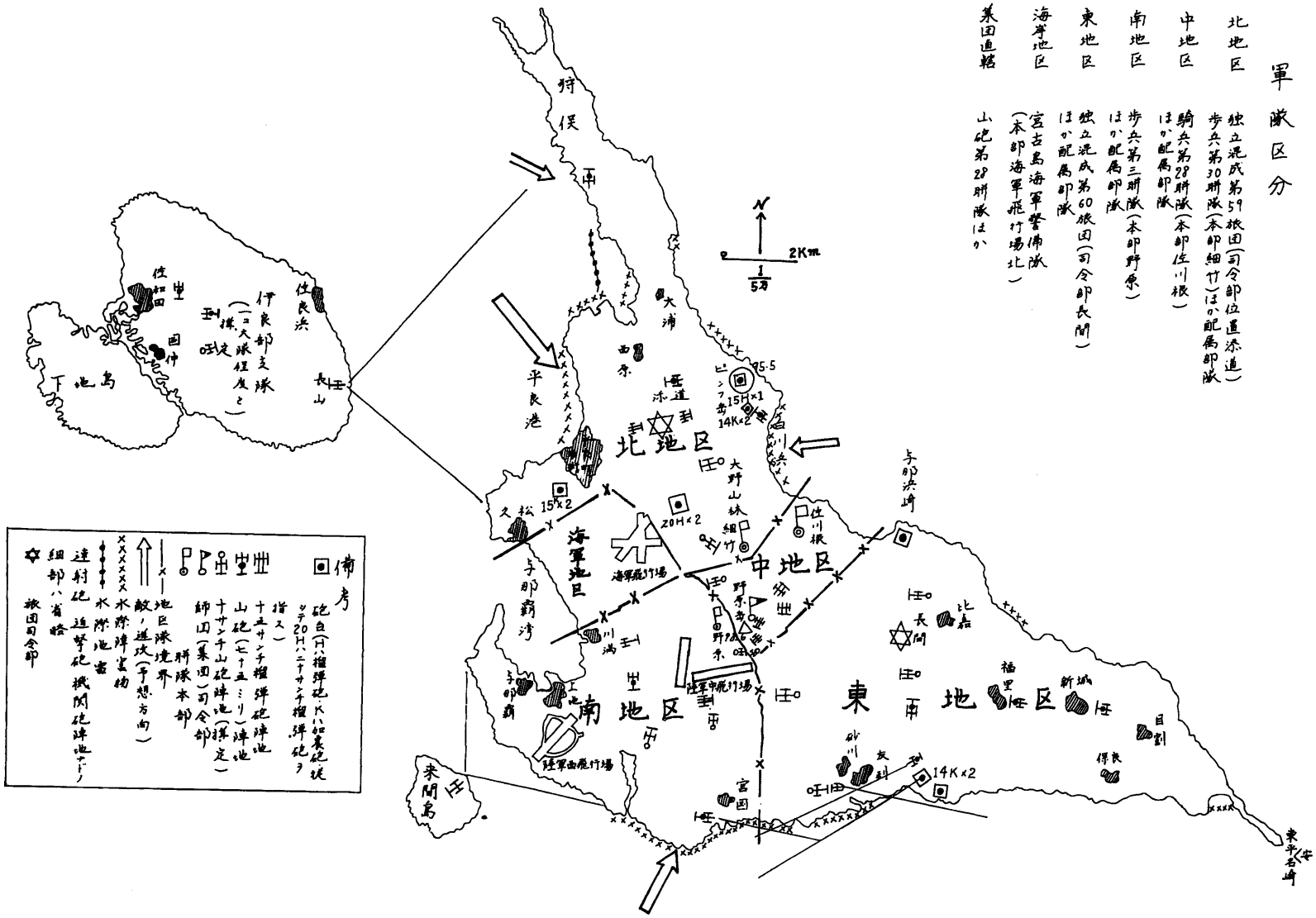
中地区　騎兵第28聯隊（本部佐川根）
ほか配属部隊

南地区　歩兵第三聯隊（本部野原）
ほか配属部隊

東地区　独立混成第60旅団（司令部長間）
ほか配属部隊

海岸地区　宮古島海軍警備隊
（本部海軍飛行場北）

兵団直轄　山砲第28聯隊ほか



この
宮古
長脇
走尾
堀江
部員

東
年間
年陸
第32
区部
動、

艦砲射撃を受け易く、東北部の一部を除き四囲が上陸可能とされ、攻むるに易く守るに難、

5月30日以降第10方面軍司令官の

主要部隊のみを記載した。
士期別、特は特別志願、少は少尉

第32軍

先島集団

集団長（第28師団長）　櫛淵鐐一　中将（24）　（18年3月より20年1月12日迄）
納見敏郎　中将（27）　（20年1月12日より20年12月13日迄）

宮古地区

第二十八師団（歩兵第三十六聯隊欠）

師団司令部
参謀長　福地春男　少将（32）
（自昭和十六年八月至二十年二月）
参謀　瀬一寿　大佐（32）
（自昭和二十年二月至二十一年二月）
参謀　陸路富士雄　中佐（37）
参謀　杉本和朗　中佐（42）
高級副官　浜久　中佐（39）
次級副官　清野秀智　少佐（特一）
兵器部長　幸田畔造　大佐（26）
経理部長　三浦信一　主計大佐
軍医部長　脇田豊　軍医大佐
獣医部長（代理）　宮田誠也　獣医大尉

歩兵第三聯隊
長　怡土軍　大佐（28）
第一大隊長　酒井一郎　少佐（准47）
第二大隊長　長谷川多喜雄　少佐（特13）
第三大隊長　芦原忠三　少佐（特13）
歩兵砲大隊長　長谷川熙敏　少佐（49）

歩兵第三十聯隊
長　富沢国松　大佐（28）
第一大隊長　山上誠之　大尉（54）
第二大隊長　中島周治郎　少佐（准50）
第三大隊長　小宮薄吉　少佐（少18）
歩兵砲大隊長　津田正男　少佐（准50）

騎兵第二十八聯隊
長　上田厳　大佐（26）

山砲兵第二十八聯隊
長　梶松次郎　大佐（28）
第一大隊長　西本勉一郎　少佐（44）
第二大隊長　鬼塚一二　少佐（50）
第三大隊長　井上善市　少佐（少18）
特設迫撃砲大隊長　久保野武　少佐（少19）

工兵第二十八聯隊
長　外賀猶一　大佐（28）

輜重兵第二十八聯隊
外師団通信隊、野戦病院、防疫給水部など
長　宮川正　少佐（51）

独立混成第五十九旅団
長　多賀哲四郎　少将（27）
旅団司令部高級部員　薮伊寿郎　中佐（27）
独立歩兵第三九三大隊長　福永侑　少佐（特）
〃　第三九四大隊長　武田登　大尉
〃　第三九五大隊長　脇本幸男　大尉
〃　第三九六大隊長　竹内隆　大尉（少19）
旅団砲兵隊長　遠藤修蔵　大尉
〃工兵隊長　美馬敬一　少佐
〃通信隊長　清谷修一　大尉

独立混成第六十旅団
長　安藤忠一郎　少将（21）
旅団司令部高級部員　甲木誉一　中佐（39）
独立歩兵第三九七大隊長　田島勇三郎　少佐（特8）
〃　第三九八大隊長　黒田猛　少佐（特7）
〃　第三九九大隊長　新井佑　少佐
〃　第四〇〇大隊長　川村尾張　大尉（少19）
旅団砲兵隊長　福島郷一　大尉（特7）
〃工兵隊長　黒木圭三　大尉（特5）
〃通信隊長　牛尾慎吾　大尉（54）

野戦重砲兵第一聯隊　第一大隊長　高矢三郎　少佐

(註) 先島集団は昭和20年5月30日以降第10方面軍司令官の隷下に入った。
(註) 本表には大隊以上の主要部隊のみを記載した。
(註) カッコ内の数字は陸士期別、特は特別志願、少は少尉候補生を示す。

第32軍

先島集団

集団長　外賀猶一　大佐（28）

宮古

輜重兵第二十八聯隊　長　宮川正　少佐（51）

外師団通信隊、野戦病院、防疫給水部など

独立混成第五十九旅団

長　多賀哲四郎　少将（27）
旅団司令部高級部員　薮伊寿郎　中佐（27）
独立歩兵第三九三大隊長　福永侑　少佐（特）
〃　第三九四大隊長　武田登　大尉
〃　第三九五大隊長　脇本幸男　大尉
旅団砲兵隊　長　竹内隆　大尉（少19）
〃工兵隊　長　遠藤修蔵　大尉
〃通信隊　長　美馬敬一　少佐
清谷修一　大尉

独立混成第六十旅団

長　安藤忠一郎　少将（21）
旅団司令部高級部員　甲木誉一　中佐（39）
独立歩兵第三九七大隊長　田島勇三郎　少佐（特8）
〃　第三九八大隊長　黒田猛　少佐（特7）
〃　第三九九大隊長　新井佑　少佐
〃　第四〇〇大隊長　川村尾張　大尉（少19）
旅団砲兵隊　長　福島郷一　大尉（特7）
〃工兵隊　長　黒木圭三　大尉（特5）
〃通信隊　長　牛尾慎吾　大尉（54）

野戦重砲兵第一聯隊　第一大隊長　高矢三郎　少佐

独立速射砲　第五大隊長　西本哲郎　少佐

独立機関銃　第十八大隊長　斎藤其蔵　少佐

第二〇五飛行場　大隊長　吉岡軍一郎　少佐

海上挺進　第四戦隊長　金子昌功　少佐（51）

海上挺進基地　第四大隊長　西江重樹　大尉
〃　第三十大隊長　藤倉長太郎　少佐

第七船舶輸送司令部　宮古出張所長　入田慶一　少佐

第三十二野戦貨物廠　宮古支部長　木村駒吉　少佐

宮古島憲兵分隊　長　武田茂一　大尉

外戦車第二十七聯隊第三中隊、特設機関砲隊など

石垣島地区

独立混成第四十五旅団

長　宮崎武之　少将（26）
旅団司令部高級部員　東畑広吉　少佐（44）
独立歩兵第二七一大隊長　宮田金吾　少佐
〃　第二九八大隊長　毛木昭　少佐
〃　第二九九大隊長　高木清太郎　大尉
〃　第二〇〇大隊長　滝口武臣　大尉
〃　三〇一大隊長　阿部繁　大尉
旅団工兵隊　長　大藤芳久　大尉

重砲兵第八聯隊　長　入野大二郎　中佐（27）

第六十九飛行場　大隊長　浅沼紀平　少佐（少）

第一二八野戦飛行場　設定隊長　山田新右衛門　少佐

外独立機関銃第十九大隊、特設機関砲第四十八大隊など

村尾重二、井上乙彦大佐）が加わり、かなり充

[illegible]（己亥初参照）

作戦準備に背馳する先島集団長らの更迭

従って米軍の攻略目標となる公算が大であった。特に南地区と北地区は上陸に適する条件が整っているだけに両地区に兵力が重点的に配備されたが、兵力に限りがあり、一部の離島（八重山群島は大小十九、宮古群島は大小八つの島から成る）は無防備とするの止むなきに至った。

十九年秋から二月初旬にかけて先島集団関係でも人事の異動があり、戦局逼迫の折奇異を感じさせるものがあった。異動人事の主なるものは

宮古島漲水港（現在の平良港）沖で米艦載機の攻撃を受け轟沈する日本軍輸送船

昭和20年3月1日陸軍輸送船豊坂丸 約2千屯 海軍輸送船大建丸（2,020トン）は宮古島への増加兵器、弾薬、燃料、補給物資等を積載して漲水港（現在の平良港）に入港、揚陸作業中、ひる過ぎ米艦載機49機の波状攻撃を受け、護衛の敷設艇ツバメ（450トン）と共に撃沈され、数十名の死傷者を出した（漲水港北岸より撮影、第28師団軍医部山田豊軍医少佐提供）

(イ)
昭和十九年十一月
輜重兵第28聯隊長　大佐　横山伊一郎
第28師団獣医部長　獣中佐　走尾　輜重兵学校長へ（少将進級）
獣医学校へ

(ロ)
昭和二十年一月～二月
第28師団長（先島集団長）　中将　櫛淵鉞二（24）　中支第34軍司令官へ
第28師団参謀長　少将　福地春男（32）　南支派遣軍参謀副長へ
台湾憲兵隊司令官　中将　納見敏郎（27）　第28師団長へ
広島師団参謀　中佐　一瀬　寿（32）　第28師団参謀長へ（大佐進級）

以上の通りで輜重兵第二十八聯隊長の後任には宮川正少佐、師団獣医部長代理に宮田輝也大尉が補職された。

各司令部、複廊陣地中枢部に移る

宮古島の第二十八師団司令部は作戦準備初期平良町在の県立女学校及び平一校々舎に石垣島の独立混成第四十五旅団司令部は県立農林学校々舎にそれぞれ設けられたが、二十年二月中旬二十八師司は島中央部に位置、複廊陣地中枢部に当る野原岳戦闘司令所に、独混四十五旅司は石垣島の最高峰標高五二六メートルのオモト岳戦闘司令所に移動、敵上陸に備えての本格的戦闘配備に入った。

石垣島守備隊司令官（独立混成第45旅団長）
宮崎武之少将（右から3人目）

この写真は先島集団長（第28師団長）櫛淵鉞一中将（24期）が幕僚を帯同、在石垣島部隊の初度巡視のため白保飛行場に到着したときのもので、左から第28師団軍医部長脇田豊軍医大佐、同参謀陸路冨士雄中佐（37期）、櫛淵集団長、宮崎旅団長（26期）、第28師団経理部長三浦信一主計大佐、独立混成第45旅団司令部高級部員東畑広吉少佐。（昭和19年9月29日）

（宮崎武之少将主要軍歴）

宮崎少将は熊本県出身、明治25年生、陸士26期、大正3年歩兵少尉任官、歩兵第2旅団副官、教育総監西義一大将副官、天津駐屯歩兵第2聯隊長、豊橋教導学校長、同予備士官学校長を経て昭和19年5月10日独立混成第45旅団長補職、先島守備隊司令官として宮古・八重山地区の防衛に任じたが、同8月先島地区守備兵力の増強に伴い旅団の担任地区が石垣島に変更されたので司令部を石垣島に移し、防衛作戦の指揮にあたった。幸い石垣地区に敵の上陸を迎えることなく終戦後復員、鎌倉市で悠々自適の生活を送っていたが、52年末永眠した。

来襲敵機延べ九千余機

英戦艦群が宮古島を砲撃

先島群島に対する米軍の攻撃は十九年十月十日の初空襲を皮切りに主として空中から実施され、二十年三月以降は英国太平洋艦隊の空母部隊も加わって終戦時迄間断なく反復続行された。攻撃の目標は飛行場、港湾施設、船舶、陣地などに集中、台湾から発進する特攻機が先島群島の飛行場を中継基地として利用することを妨害すると共に海上補給の封殺、陣地の破壊、兵員の殺傷に威力を発揮した。時たま艦載機の外に比島方面からの大型機も参加、宮古島に対しては二十年五月四日英太平洋艦隊による艦砲射撃も加えられ、空爆の余波は民家にも及び、宮古島では公共建築物、一般住家の大部分が焼失又は破壊され、非戦闘員の犠牲も夥しいものがあった（石垣地区の民家の被害は小範囲に止まる。）

公式資料によると宮古地区では来襲延べ機数五、二五〇機、石垣地区では三、九一九機に上った。これに対し先島群島所在の対空部隊（主として海軍高角砲、同機銃、陸軍特設機関砲隊）は全力をあげて果敢な邀撃戦闘を展開、宮古地区では撃墜破四十三機、石垣地区では同四十四機の戦果を収め、塔乗員十数名を捕虜にした。

（註）これらの捕虜は那覇及び台湾へ送られたが、石垣島で三名、宮古島で一名が処刑され、戦後戦犯事件を惹起した。

宮古島上空で初空中戦

第十方面軍（台湾軍）では沖縄に対する特攻作戦（主として第八飛行師団＝山本健児中将）強化のため宮古島所在飛行場の機能発揮に支障なからしむべく、二

昭和20年6月7日宮古島近海上に於て特攻々撃を受けて沈みいくアメリカ海軍の駆逐艦ポータ。

十年四月二十二日夕刻実施部隊の反対を押し切って第八飛行師団傘下の飛行戦隊から一式及び三式戦闘機を以て中飛行場の制空に任ぜしめ、特攻機の薄暮攻撃実施の機を狙った。然るに味方戦闘機隊が制空を終え帰投せんとした矢先、米艦載機の急襲に遭い、十分なる戦闘態勢を整え得ざる間に四機を喪失、地上で数機が破壊炎上、日本軍の企図は完全に失敗の止むなきに至った。この苦い経験に照らし爾後は先島群島方面に対する味方機による制空は行われなかった。この空中戦は十九年十月の台湾沖航空戦に次ぐものであった。

猶二十年春以降は敵夜間戦闘機が先島方面に出没、日本機の夜間行動も制約を受けるようになり連絡のため宮古島に赴いていた第八飛行師団参謀東川信雄少佐（50期）の搭乗機が四月二十二日帰任の途中、石垣島上空で敵夜間戦闘機に襲われ戦死したこともあった。

石垣地区では甲戦備態勢

二十年四月一日米軍の主攻が沖縄本島に向けられた結果、先島方面に対する上陸の虞れは薄らいできたが、六月に入るや米軍が先島方面に対し新たな作戦を開始する兆候が窺われ始めた。宮古島地区では敵空挺部隊降下の算大なりとして六月二日乙戦備を下令、警戒態勢を強化したが、石垣地区では六月十日敵上陸の虞れ大なりとして甲号戦備に移行、地上戦闘準備のため市街地区の住民を東北部の山岳地帯に強制的に避難せしめるなどの措置を取った。然るにこの山岳地帯は元来マラリヤの猖獗地であったため爆発的に蔓延、栄養失調などの悪条件も重なって非戦闘員三千余名が斃れるという大惨事を惹起した。宮古地区では住民の強制疎開などの措置は取れなかったが集団長納見中将は兵力の分散を避け、本島の渡りを固めるため、伊良部支隊（独混59旅基幹）の主力を北地区に移し、平良町方面一帯の防備を強化した。

宮古島海軍警備隊司令
村尾重二大佐
鹿児島県川内市出身、昭和19年12月館山砲術学校教頭より補職。

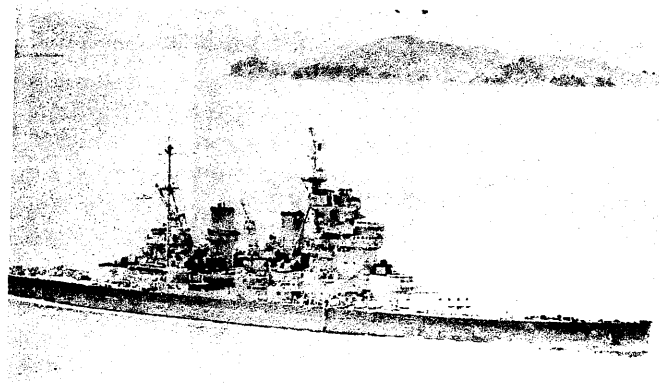
先島集団、方面軍直轄に

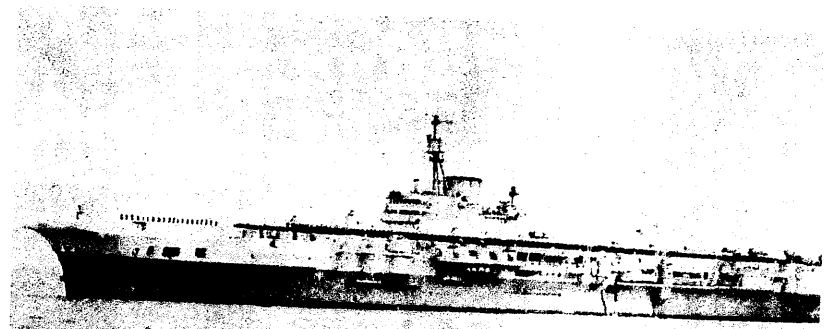
先島地区の陸軍部隊は編成上第三十二軍の隷下に属し、又海軍部隊は沖縄方面根拠地隊司令官の指揮下にあったが、沖縄方面の戦況悪化に伴って指揮系統を改める必要が生じ、五月三十日陸軍部隊は第十方面軍の直轄下に、海軍部隊は高雄警備府司令長官の隷下にそれぞれ転じた。

この措置は先島集団の上級軍である第三十二軍が崩壊の危機に瀕し、軍司令官の先島集団に対する指揮連絡が不能になることを見越してなされたものである。一資料によれば、先島群島の防衛作戦については先島集団長の裁量に一任されており、沖縄作戦中、上級司令部による命令、指示などは殆んどなされず連絡程度に止まったとも云う。

英太平洋艦隊の先島群島作戦

（写真上）戦艦ホウ（下）航空母艦インデフェイガブル。





一九四四年英国海軍は沖縄作戦参加を決めローリングス提督麾下の太平洋艦隊（空母四、戦艦二、巡洋艦五、駆逐艦十一隻）は翌四十五年（昭和二十年）三月二十六日宮古島近海に接近、同島の飛行基地に対し第一回の空中攻撃を加えた。同艦隊は米海軍との作戦協定によって先島群島方面の哨戒攻撃を受け持ち、同群島を経由する日本機の沖縄周辺海域の米艦船に対する特攻々撃封殺を行なった。

同艦隊は八日間のレイテ泊地における休養を除いて五月二十五日の作戦打ち切り迄六十二日間に亘って作戦に従事、この間延べ五、三三五機を出動させて宮古及び石垣島の航空基地を攻撃、九五八トンの爆弾の外機銃弾五十萬発、ロケット弾九五〇発を発射、更に二百トンの艦砲弾を加え、日本機九十八機を撃墜、ほぼ同数の日本機を地上で撃破した。これに対し空母ヴィクトリアス、同じくフォーミタブルが特攻機の攻撃を受けて損傷、塔載機一六〇機が戦闘又は事故で喪失するなど砂からざる損害を蒙った。

五月四日の宮古島に対する艦砲射撃は空中からの攻撃のみでは基地制圧の効果十分ならずに照し実施されたもので、同日午前十一時戦艦二隻を基幹とする十数隻が同島西南海上数マイルに接近、およそ三八〇発の主砲弾を撃ち込んだ。目標は主として飛行場に集中されたが、一部は市街地付近にも落下、全島を震憾せしめた。艦砲射撃はこの日のみに止まり一種の威嚇に終ったが、たま〳〵この日は沖縄戦線に於て日本軍主力の本格的攻勢作戦が始まった矢先でもあり、この艦砲射撃は日本軍を索制する一種の陽動作戦と思われる。

一資料によれば米軍は沖縄攻撃を単独で遂行する力を持っていたので協同作戦の煩しさを避ける上に於ても当初は英海軍の参加を余り歓迎しなかったと云う。

飢餓と風土病との闘い

先島集団の当面する難問は食糧、医薬品の外日常生活物資を制空制海権喪失、孤立した環境下に在ってどう入手、確保するかであった。当時の推定では宮古地区では住民およそ六萬名に加えて陸海軍およそ三萬名、石垣地区では住民三萬余に加えて陸海軍およそ八千名を擁したとされるが、主食の飯米は十九年秋以来台湾からの移入が杜絶え、爾来僅かのストックと甘藷に依存するに外なく、特に宮古地区に於ては軍が手持ち糧秣の食い延ばしを図るため民側に甘藷、野菜、甘味品、肉類の供出を求める一方、民有田畑を接収して直轄農場となし食糧の自給強化策を講ずるなどの措置を取ったため民側の食糧需給を圧迫、加うるに連日の空襲で畑仕事や漁撈作業が妨害され、又労働力の中心である青壮年の多くが兵役に取られるなどの事情で労働力が拂底、食糧の自給自足は困難を極めた。更に医薬品、調味料の欠乏著しく、医療施設亦貧弱を極め、栄養失調患者及びマラリヤなどの風土病に罹患する将兵並に非戦闘員が続出、宮古地区では戦死を含めて軍人軍属二、四〇九柱（海軍、船舶乗組員関係の外民間人戦災死一〇三名を加えるとおよそ三千名と推定）が戦歿、石垣地区では陸軍関係四〇二海軍関係が二六五、外に甲戦備下令に伴う一般住民の強制避難が原因となって生じたマラリヤ罹災者三、八八五名が死亡する大惨事となった。

戦後本土出身関係者の遺骨の大部分は厚生省の手で遺族の手許に送還、宮古・平良市に豊旗之塔、石垣市に八重守之塔の外当時の関係者の手で建立された慰霊塔若干があり、戦歿者の霊をなぐさめている。

輸送船の海没相次ぐ

太平洋の戦火が南西諸島に波及するに及び先島群島一帯は海上補給路を狙う敵機の跳梁の場と化し、海上輸送路は危殆に瀕し、二十年三月以降は完全に杜絶するに至った。爾後沖縄戦終了後小型船舶による台湾との連絡が数回試みられたが、敵機の哨戒厳しく、成功した例は少なかった。

空襲による船舶の被害は宮古地区で十九年十月十日貨物船広田丸（二、二一一トン栃木汽船所属、シャム米五萬袋積載、南方からの帰途）が海没したのを皮切りに二十年三月一日陸軍輸送船豊坂丸（二千屯）、海軍輸送船大建丸（二、〇二〇トン）が大量の兵器、弾薬を満載したまま海没、護衛の敷設艇つばめ（四五〇トン）も敵機の餌食と化し、乗組員など百数十名（明確を欠く）の犠牲者を出した外、終戦時迄に近海に於ける遭難を含めて艦船、小型輸送船、機帆船など十二隻が敵の攻撃で海没している。

一方八重山地区では船浮港内で大型輸送船数隻が海没、石垣港沖でも若干の小型輸送船、機帆船、その他与那国沖でも漁船などが遭難している。

猶これら遭難艦船の乗組員などは先島群島所在部隊に仮入隊、作戦に従事、終戦後復員したが犠牲者の数は数百名に達するものと推定される。

米軍・宮古島攻略を中止

米軍は沖縄作戦の第三段階に於て航空基地網拡大のため宮古島を始め、久米島、南大東島、徳之島、喜界島などの攻略を企図していたが四月二十六日海軍太平洋方面総司令官ニミッツ元帥の命令で無期延期となった。この理由は沖縄本島にB29用の飛行場適地が発見され、他に航空基地を求める要がなくなったと解されている。然しこの件は日本側の窺い知るところとならなかったので先島集団では引続き敵の上陸を想定しての作戦が遂行された。

（写真は野原岳戦斗司令所における先島集団長納見敏郎中将（昭和二十年夏）

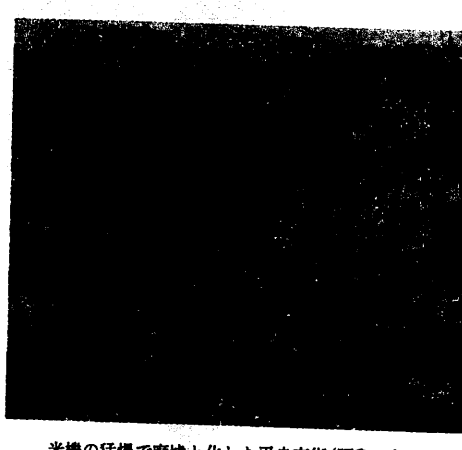
沖縄特攻作戦に役立った先島諸島基地

九州の陸軍第六航空軍並びに海軍第五航空艦隊と呼応して沖縄特攻作戦の一翼を担った台湾の第八飛行師団は作戦中、特攻機二二八機（外に誘導、直掩機など多数）を出動させて沖縄近海の敵艦船を攻撃、大きな戦果を収めたが、使用機（九九式襲撃機を除く）の性能上、台湾北部―沖縄本島間およそ七百キロを往復することは航続距離の限界であった。特に特攻機を誘導、直掩、戦果確認の任務を持つ機にとっては帰還の要があり、任務達成を容易ならしめる上に於ても途中適当な中継地が不可欠とされ、又不時着機の収容上の観点からも必要であった。台湾、沖縄間に点在する先島諸島はこの戦術上の要求に合致するものであった。よって第八飛行師団では二十年二月隷下の第九飛行団（柳本柴喜大佐―34期）を石垣島に配し、又参謀を宮古島に派遣して先島諸島の航空基地を利用する八飛師倉下の航空機を統一指揮した。特攻の多くは薄暮を選んで実施され、戦果はそのつど方面軍、第32軍、八飛師などから現地所在部隊にも通報され、士気昂揚に寄与した。特攻関係機のほか、輸送機を以てする連絡が台湾との間に行われ、緊急物資の補給などにも任じたが、四月以降は米夜間戦闘機による妨害が活発化し、航空機による夜間連絡は極めて困難な状況となった。

五月に入るや第九飛行団司令部は石垣島から台湾へ引き揚げ、六月初め第八飛行師団は沖縄作戦を事実上打切り、台湾周辺の防衛に専念する態勢に復した。

第八飛行師団長山本健児中将の戦後の回想記によれば、八飛師所属機の出撃は二十年三月二十六日行われた伊舎堂用久大尉（のち中佐、二所級特進）の率いる誠第十七飛行中隊をトップに五十七回にわたって行われ、十一回は石垣、三回は宮古島の基地を利用している。特攻による戦果は艦船撃沈破一一五隻（日本側資料）とあるが、米側資料によるとこの数字は誤りで被害は僅少に止まっている。

侍従武官坪島文雄中将（26期）は南西諸島派遣部隊に対する聖旨伝達のため、台湾経由、19年10月16日宮古島を訪れ、慰瀧集団長より軍状報告を受け、御下賜品を伝達した。
（写真は中飛行場に於て米機の残骸についての説明を聞く坪島中将、左から陸路参謀、福地参謀長、坪島中将、２人置いて杉本参謀）



米機の猛爆で廃墟と化した平良市街（昭和20年8月）桟橋から撮影、上方は焼け残った宮古神社。

日本、遂に降伏

全南西諸島に平和甦る

六月下旬沖縄戦終了後の米軍の鋒先は本土上陸作戦準備に向けられ、先島群島に対する空襲は下火となり、忘れられた島の感が深くなった。空襲は六月一杯は間断なく続けられたが、七月に入るやサミダレ式に減少し、日によってはその姿を見ない時もあった。軍民の間には先島群島に対する敵の上陸は免かれたとする一種の安堵感も生まれ、次に来る飢えとの戦いに取組む姿勢と工夫に総力が結集され、食糧増産への動員態勢が強化された。集団では一応十月中旬迄の需要に耐え得る糧秣を保有していたが、補給皆無に加えて保管不良によるロス等もあって将兵の給与は質量共に粗悪化し、体力の維持は限界に近ずきつつあった。而も敵海空軍の哨戒は引続き厳重でこのため台湾との海上連絡の目算も立たず、戦争長期化に伴う犠牲者の増大が懸念された。事実、終戦が数ケ月遅れたと仮定した場合、食糧をめぐる軍民間の確執摩擦の増大、栄養失調の普遍化は容易に予測出来たことであった。

八月に入り戦局は絶望的となり、十五日ポツダム宣言受諾、日本の無条件降伏決まり、三年有半に及ぶ太平洋戦争に終止符が打たれた。二十日過ぎ米軍から停戦交渉のため軍使派遣の要求があり、集団では第十方面軍（台北）司令官の指示を仰ぎ、独混第59旅団長多賀哲四郎少将、第28師団参謀長一瀬舜大佐、同参謀杉本和朗中佐、海軍警備隊司令村尾重二大佐の一行が第十方面軍差回しの輸送機で沖縄へ向い、米軍代表と停戦についての下交渉を行なった。引続き二十三日先島集団長納見敏郎中将、一瀬参謀長、杉本参謀らが米軍機で沖縄へ飛び正式に停戦協定に調印、二十五日南西諸島所在の全日本軍に対し戦闘行為停止が下令され、戦火が収まった。翌二十五日キャノン准将の指揮する米海兵隊およそ二千名が乗り込み、日本軍の武装解除に当り、兵器弾薬等は海中に投棄処分、車両、燃料、被服等の軍需資材及び糧秣は各官庁、団体に委託保管せしめ、のち払い下げた。

先島群島地区は南部琉球列島として沖縄地区から切り離され、十二月米海軍々政下に入った。

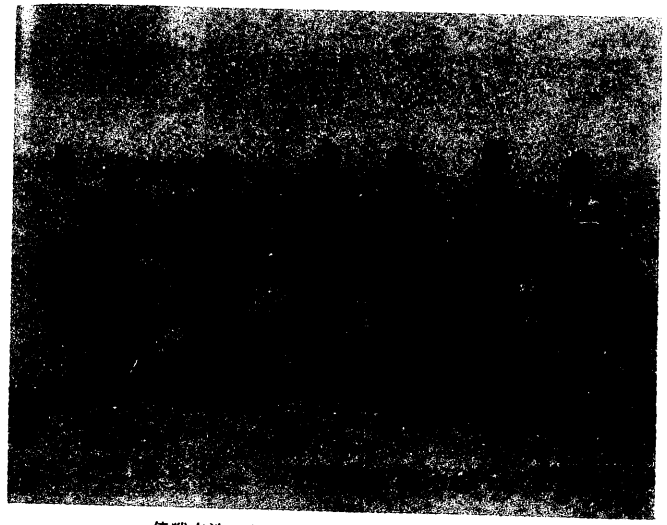
降伏文書調印式

納見中将ら出席

九月七日沖縄島カテナ飛行場に於て南西諸島所在日本軍の降伏文書調印式が行われ、米軍を代表して第十軍司令官スチルウエル大将、日本軍を代表して先島集団長納見敏

郎中将、奄美地区守備隊司令官（独混第64旅長）高田利貞少将、海軍奄美方面隊司令官加藤唯男少将がそれぞれ署名した。

納見中将は第32軍関係指揮官で将官クラス生存者（先島地区四、奄美地区一）の最先任上位者、加藤少将は海軍部隊最上位者にあたるのでそれぞれ陸海軍を代表して出席、調印したもの。高田少将は第十六方面軍（西部軍）隷下の奄美守備隊を代表して調印した。



停戦交渉のため沖縄に向う日本軍々使一行

左から第28師団参謀長一瀬舜大佐、独立混成第59旅団長多賀哲四郎少将、宮古島海軍警備隊司令村尾重二大佐、第28師団参謀杉本和朗中佐、その右は通訳）於海軍飛行場。

戦犯追求と納見中将の自決

連合軍は日本占領と同時に仮借なき戦犯追求に乗り出し、多くの軍政、官界及び民間団体指導者が逮捕投獄された。十二月一日大量のBC級戦犯容疑者が一括指名発表されたが、その一人に第二十八師団長納見中将が含まれていた。納見中将（広島県尾の道市出身）は昭和十五年以来憲兵司令部本部長、上海憲兵隊司令官、憲兵学校長、台湾憲兵隊司令官と憲兵畑を歩み、捕虜管理などの職責から戦犯容疑に問われる可能性が大きく、中将自身もある程度予測していたようである。

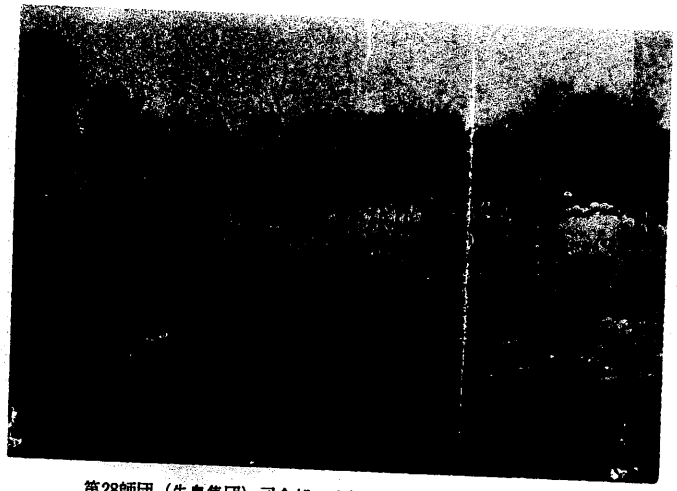
容疑内容については明かでないが、上海憲兵隊司令官当時、抗日テロ分子の結社と

甘藷（代用食）を試食する陸海軍将校

（左から）第28師団参謀長一瀬舜大佐、同参謀陸路高士雄中佐（右端）、輜重兵第28聯隊長宮川正少佐。

して知られる藍衣社員二十八名を一挙に逮捕処刑したことが中国側に取り上げられ、戦犯として追求を受けたのではないかとも解されている。十三日出頭を前日に控えた納見中将はかねてより覚悟していた通り野原越の官舎に於て服毒自殺、満五十年の生涯を閉じた。遺体は米軍の検屍後ダビに付され、遺骨は留守宅へ送られた。

自決の動機は敵の縄目を受けるに忍びないに尽きると思われるが、この外七月十一日頃宮古島で米機搭乗員一名の処刑を命令したことにも責任を感じたのではないかと考えられる節もある。（本項は後述）



第28師団（先島集団）司令部の武装解除のため、乗り込む米占領軍

（宮古島野原越・昭和20年9月）

刑死者七名を出した石垣島戦犯事件

沖縄作戦中、先島群島に来襲した敵機中日本軍の地上砲火を浴びて撃墜破されたのも少くなかったが、これらの搭乗員のうち一部はパラシュートで脱出降下、捕虜となった。これらの身柄は殆ど台湾又は沖縄（二十年二月以前）へ送られ、抑留生活ののち解放されたが、石垣島で三名、宮古島で一名が処刑され、処刑関係者は戦後米軍の手によって摘発されて軍事法廷に付され、断罪された。そのあらましは次の通りである。

石垣島海軍警備隊は昭和二十年四月十五日朝大浜海岸付近に降下した米艦載機搭乗員三名を捕え、夕刻石垣町バンナ岳の本部付近に於て処刑、戦後事件の発覚を慮れて遺骸を発掘、火葬に付したあと骨灰を石垣沖の海中に投棄、証拠湮滅を図ったが、米軍の捜査はきびしく、更にこの間の事情を知る警備隊本部勤務者（A主計少尉ともB

停戦協定交渉のため沖縄に向う日本軍軍使の搭乗機

（昭和20年8月宮古島海軍飛行場）

下士官とも云う）の密告等もあって包み切れず表面化するに至った。その結果、警備隊司令 井上乙彦大佐、同副長井上勝太郎大尉、第二十三護衛隊長幕田稔大尉、警備隊付根本寒応中尉、同田口泰正少尉、上等兵曹成迫忠邦、一等兵曹藤中松雄ら三十九名が横浜軍事法廷に付され、二十四年一月二十八日判決、前記七名の死刑を含む三十九被告の有罪が決まった。一度に七名もの刑死者を出したこの事件は残虐を極めたなぶり殺し、証拠湮滅等に加えて井上大佐ら各被告の陳述が統一を欠き責任転嫁の印象を与えるなど軍事法廷の心証を損ったことが断罪を苛酷なものにした原因の一つとされている。

（註）井上大佐らは捕虜処刑の理由として収容施設に欠く、台湾へ送る手段がない、食糧の余裕がないなどを挙げて陳弁したが、認められなかった。実際は井上司令が冷静な判断を欠き、血気盛りで敵愾心旺盛な井上副長や幕田大尉らの「空爆で犠牲になった部下の仇討、将兵の士気昂揚のため軍陣の血祭りに供するが適切」との意見が処刑へ踏切らせたのではないかとも考えられる。

日本軍の手で爆破された陸軍野戦用電波警戒機
（昭和20年9月宮古島野原岳頂上）

米軍に接収された日本軍の兵器弾薬
（昭和20年9月宮古島漲水港埠頭付近）

船浮要塞司令官　下永憲次大佐（23期）
（自昭和16年9月　至19年4月）
昭和18年頃竹富村（西表島）民有志と（右端は浜比嘉警部補）

米飛行士一名を銃殺

謎の多い宮古島戦犯事件

宮古地区での米飛行士捕虜についての記録は四件が公式文書として残っているが、何れも表面上は上級軍へ身柄を送付（一件は搭乗機の事故で全員死亡）されたとあるが、戦後米軍の調査で二十年四月二十九日野原越付近で捕えられたフローレンス海軍少尉が日本軍の手で殺害された容疑が固まった。発覚の端緒については諸説があるが、戦後宮古島から沖縄本島へ送られた作業隊（歩兵第三聯隊長怡土大佐の指揮で数千名がおよそ一年近く労役に従事した）の某中尉（二世出身と云われる）から洩れたのがきっかけとなったと云う。二十二年頃から容疑者の逮捕が始まり、二十三年七月二十六日横浜軍事法廷で元参謀陸路冨士雄氏外三氏が有罪、最高二十五年から三年迄の重労働刑を宣告（求刑なし）された。判決によると後方主任参謀で捕虜管理の任ずる陸路被告（中佐）は捕虜に危険なる作業を強制することを容認し不法なる殺害に寄与したとおり、残りの三被告は実行に加わったとしている。

フローレンス少尉の処刑日時は七月十一日頃とあり、明確ではないが、場所は野原越司令部付近の松林の中でピストルにより射殺されたとある。遺骸は一旦埋葬したのち戦後掘出され、火葬の上、遺骨は台湾へ送られた。

処刑は納見師団長の命令によるとされ、理由として（一）捕虜が反抗的で管理に手古摺った（二）食糧、収容施設に欠く（三）作業の関係で外出が多く、日本軍の陣地配備などに通じていたので、敵上陸の際万一敵手に落ちた場合、日本軍の戦斗を不利にする虞れがある。などが弁明の材料となったが師団長命令については納見中将が遺書の中で触れていないので立証の途なく、又一瀬参謀長も当日は陣地視察のため司令部を留守にしていたので関与しなかったと云うことで、結局陸路参謀が全責任を負わざるを得ない羽目になったと云う。法廷では一瀬参謀長及び憲兵分隊長武田茂一大尉の責任についても言及されたが、両氏の釈明が認められ、事無きを得た。陸路氏ら四氏は講和発効後間もなく釈放されたが、納見中将、一瀬参謀長に対する不信は消えず、後味の悪さを残した。

宮古島、石垣島両戦犯事件を通じて興味を惹くのは石垣島が海軍部隊、宮古島が陸軍部隊によって事件が起こった点で、背景に指揮官の性格、判断、実行力が影響したと思われる節がある。すなわち石垣島海軍警備隊司令井上大佐は性格が激しく、離島の任地を潔しとせず、部下に接する態度にも問題があったようで必ずしも心服されていなかったと云う。これに反し陸軍の宮崎少将は人格高潔、温厚な人柄で部下将兵の受けもよく、捕虜は人道的に遇し便船あり次第台湾へ送付していたので面倒な事件を惹き起こさずに済んでいる。

次に宮古島の場合、海軍の村尾司令もこれ又温厚な武人で捕虜取扱いも慎重を期し、身柄は台湾へ送ったので問題はなかった。然し陸軍の納見中将は秋霜烈日、部下からも畏怖された果断実行型の将軍で所謂ワンマン型、捕虜処刑の決断も敢えて遠慮しなかったと考えられる。貧乏くじを引いた陸路氏は戦後の回想で憲源中将か福地少将の何れかでも残っていたならこのような事件は避けられたのではないかと述べているが一理あることである。

この外宮古島では二十年七月始め頃（？）米潜水艦から潜水した沖縄出身のスパイ容疑者一名（名護出身、沖縄戦で米軍に収容）を捕え、処刑したと云う風説もあるが明確な資料はない。

復員業務スムーズに完了

終戦に伴う先島集団関係将兵の復員業務は初め船腹払底などの事情で二年内外を要するとみられたが、聯合国の好意による船舶の大量貸与がなされたため急ピッチで進む見通しが立ち、十一月二十五日米輸送船コーヘン号による宮古島関係将兵の復員輸送を皮切りに連続的に輸送船が回航、二十一年一月下旬迄に先島地区の復員業務は沖縄本島の作業部隊に組み入れられた一部将兵（二十一年十月迄）を除き完了した。

納見中将亡きあとの先島集団長代理安藤忠一郎少将（独混第六十旅長・21期）、一瀬参謀長、陸路参謀（杉本参謀、高級副官浜中佐らは復員業務連絡のため二十年秋先発）らの司令部要員は二月下旬最後の復員船で出発、故国の土を踏んだ。上陸地は大竹港が充てられた。

終戦時における先島集団（大東島所在の歩兵第三十六聯隊を除く）関係将兵は宮古地区が将校一、〇六八名、准士官、下士官四、五〇三名、兵一八、二一八名、軍属七六四名、計二四、五九一名、外に海軍部隊がおよそ二、五〇〇名、石垣地区が将校二五二、准士官、下士官、兵四、九二一名、軍属二三九、計四、七〇五名、外に海軍部隊がおよそ三、三〇〇名、大東地区（大東支隊は終戦後先島集団長の隷下に入る）が将校一六五名、准士官、下士官六五二名、兵三、七八八名で計四、七〇五名、外に海軍関係一、六一四名。

海軍を除く先島集団合計（大東地区を含む）は将校一、五〇三名、准士官、下士官五、四一四名、兵二六、八八八名、軍属一、〇二三名、総計三四、七〇八名。なお現地入隊者は九月一日付で全員（一部の残務処理関係者を除く）復員を終っているので前述の数字には含まれない。

軍旗四旒を奉焼

先島集団関係部隊で軍旗を授けられていた聯隊は歩兵第三、同三十、同三十六（大東島）、騎兵二十八の四コ聯隊で、大本営の指示により歩三、三十、騎兵二十八の三旒は終戦直後の八月三十一日（一資料によれば九月十五日）野原岳洞窟司令部の中で又歩三十六旗は九月十五日聯隊本部前の陣地に於てそれぞれ焼却処分に付され、光輝ある聯隊の歴史を閉じた。

官民の作戦協力

非戦斗員の犠牲も甚大

宮古、八重山地区に陸海軍の大部隊が本格的に配備され出した十九年夏頃から所在官民の軍に対する作戦準備協力が真剣且つ全面的に始まった。先ず作戦の足手まといとなる非戦斗員（主として老幼婦女子）の県外疎開が強行され、およそ二萬名が主として台湾（一部は九州）へ戦火を避けて疎開した。これと併行して飛行場、陣地構築作業に従事する労務の供出動員も行なわれ、十月以後は現地入隊、警備、防衛召集も大々的に行なわれて全住民をあげての作戦協力態勢が推し進められた。

各官公衙、学校などの公共建物は一部を除き軍用に供され、又民家の大半も取り壊されて兵舎の資材に変り、二十年二月以降は地方行政、学校などの殆どが機能を停止、県立中学校、農林学校、女学校などの在校生は大半鉄血勤皇隊、臨時従軍看護婦として軍務に服し、通信、築城、対空監視、傷病兵の看護などに挺身、奉公の至誠を尽し防衛の一翼を担った。幸いにして先島地区及び大東地区は敵の上陸を迎えることなく終戦に持ち込まれたので地上戦斗による惨劇を免かれたが、相次ぐ空襲、食糧難、風土病などの挟撃を受け、犠牲者は夥しい数に上った。特に石垣島ではマラリヤによる惨禍が著しく、八重山支庁長大舛久雄氏は五月三日、石垣町長山口盛包氏は六月一日空襲で殉職、外に知名士多数が災禍に遭った。

（註）民間の被災については精確な資料が得られないので概略に止めた。

一、参考及び引用（写真を含む）文献

服部卓四郎著「戦史叢書・大東亜戦争全史」
防衛研修所戦史室著「沖縄方面陸軍作戦」
高田利貞著「運命の島・奄美と沖縄」
サンケイ新聞出版局編「陸海軍の血戦・沖縄」
中野五郎編「記録写真・太平洋戦争」
八原博通著「沖縄決戦」
神直道著「沖縄斯くて遺滅す」
文芸春秋社刊「目で見る太平洋戦争史」
読売新聞社刊「実録・大東亜戦争史」
週刊新潮
児島襄著「指揮官」
潮書房刊「丸」ある特攻隊

二、調査指導協力・資料（写真を含む）提供者御芳名（敬称略・順不同・職名は一部を除き戦時中・沖縄戦当時関係のもの）

（註）先島群島関係は拙著「先島群島作戦」に掲載済みにつき本誌では省略する。

（イ）陸軍関係

第十方面軍参謀長　諫山春樹
第九師団長　原　守
第32軍高級参謀　八原博通
防衛研修所戦史部　伊藤常男
第32軍参謀（航空）　釜井耕輝
大本営陸軍部参謀（船舶）　馬淵新治
偕行社事務局長　瀬能酵一
歩兵第32聯隊長　北郷格郎
厚生省援護局調査課
第八飛行師団参謀　川野剛一
第八飛行師団高級副官　梶山　健
沖縄憲兵隊副官　美座時成
第62師団輜重隊長　萩之内　清
独立混成第64旅団副官　杉本秀義
独立混成第44旅団副官　篤　民雄
第九師団の会　山田省一
独立歩兵第十三大隊　田辺文治郎
独立歩兵第二十三大隊　日比野勝広
野戦重砲兵第一聯隊本部　内畑　弘
社団法人　水交会
第32軍司令官　渡辺正夫中将御遺族
船舶司令官　佐伯文郎中将令室　喜世子
第32軍参謀長　長勇中将令息　博連
第62師団長　藤岡武雄中将令室　トヨ子
第44軍司令官　本郷義夫中将御遺族
第八飛行師団長　山本健児中将令室　鹿子
歩兵第63旅団長　中島徳太郎中将令息　彬夫
独立混成第44旅団長　鈴木繁二少将令室　清子
歩兵第64旅団長　有川主一少将御遺族
第十方面軍参謀副長　北川潔水少将令室　繁子
独立混成第64旅団長　高田利貞少将御遺族
第62師団参謀長　上野貞臣大佐令息　貞芳
独混第44旅団第一歩兵隊長　柴田常松大佐令室　照子
第32軍兵器部長　桜井貴大佐令室　包子
第32軍経理部長　佐藤三代治主計大佐　令室　鶴子
野砲兵第42聯隊長　西沢勇雄大佐令室　ひで
第11船舶団長　大町茂大佐令室　ミチ子
歩兵第22聯隊長　吉田勝大佐令室　レツ
野戦重砲兵第一聯隊長　山根忠大佐御遺族
第32軍々医部長　篠田重愚軍医大佐令息　重見
歩兵第89聯隊長　金山均大佐令息　光利
重砲兵第七聯隊長　樋口良彦大佐令室　鶴代
輜重兵第24聯隊長　中村卯之助大佐令息　孝
歩兵第21聯隊長　井上二大佐令息　高慶
独立混成第22聯隊長　鬼塚義惇大佐令室　とし
重砲兵第六聯隊長　末松五郎中佐令室　喜美
第五砲兵司令部高級副官　砂野芳人中佐令室　マス
独立歩兵第12大隊長　賀谷与吉大佐御遺族
戦車第27聯隊長　村上乙中佐御遺族
第32軍高級副官　葛野隆一中佐御遺族
独立混成第64旅団司令部高級部員　中溝猛中佐令室　治子
独立歩兵第15大隊長　飯塚豊三郎少佐令息　洋人
独立歩兵第23大隊長　山本重一少佐令息　豊顕
第32軍参謀　三宅忠雄中佐御遺族
第32軍参謀　薬丸兼教少佐令室　静子
第24師団参謀　苗代正治少佐令室　清
第24師団参謀　杉森貫少佐令室　ヨシエ
第62師団参謀　楠瀬集師少佐令室　二三子
第24師団高級副官　山口貞治少佐令室　キヨ
第32軍副官　坂口勝大尉令室　ひさの

（ロ）海軍関係

奄美方面隊司令官　加藤唯男少将令息　昌義
沖縄根拠地隊司令官　新業孝造少将令室　芳子
沖縄根拠地隊参謀　前川新一郎大佐令室　夫佐子
沖縄根拠地隊参謀　羽田二郎大佐令室　キン
沖縄根拠地隊参謀　棚町整大佐令室　ミサオ

（ハ）一般

沖縄県特高課長　佐藤喜一令室　かつ
朝日新聞那覇支局長　宗貞利登令室　繁子
毎日新聞那覇特派員　下瀬豊御遺族

右の外琉大農学部教授高良鉄夫、那覇官庭裁判所判事仲本正真（沖縄戦当時、那覇地裁検事局勤務）、沖縄タイムス専務牧港篤三、沖縄県庁援護課徳田安周の各氏から資料及び御指導を得た。

次に宮古島の場合、海軍の村尾司令もこれ又温厚な武人で捕虜取扱いも慎重を期し、東島、騎兵二十八の四コ聯隊で、大本営の指示により歩三、三十、騎兵二十八の三個

あとがき

一、本書は当初五十二年春刊行の予定だったが、資料収集が予想以上に手間取り、大幅遅延の止むなきに至った。

二、資料、特に戦時中の日本軍関係写真は入手極めて難渋を来し、特に戦斗場面の写真は皆無に等しいので人物写真を中心に収録、戦斗場面は米国防総省提供（既公開）に依存せざるを得なかった。

三、戦時中（支那事変以後）軍高級将校の写真は特に許可せられたのを除き公開を禁ぜられ、日の目を見なかった。大方の遺族関係者は若干アルバムなどを所持していたようだが、戦災などで喪失、散逸せるケースが少なくなく、およそ二百名近くの遺族関係者に照会したが、前述の事情で所期の成果が得られなかった。一部の遺族は肉親を沖縄戦で喪ったと云う心情的なものから本書刊行の目的、真意を理解するに至らず、資料提供を深しとしない向きもあった。

四、沖縄現地官民関係の写真（資料）は殆ど存在していないようで入手の方法なく、極く一部、小範囲に止めざるを得なかった。

五、本書は第一版に引続き資料を補足訂正、筆を新たにして第二版を出すべく準備中である。

終りに臨み本書刊行に際し多大なる御協力御賛助を賜った左記各位に対し御芳名を記し感謝の意を表する次第である。

賛助者御芳名（順不同・敬称略）

沖縄製糖株式会社　社長　竹野寛才
沖縄県各種学校協会長　名城政次郎
那覇尚学院・コザ尚学院長
沖縄司法・行政書士会長　仲程長宗
司法・行政書士
在沖縄宮古郷友連合会長　金城英浩

編者略歴

一、大正九年生
一、戦前戦後を通じ、新聞、文筆活動に携わる
一、昭和十九年、宮古朝日新聞社長
一、著書
『宮古島戦記』　一九六六年三月
『石垣島防衛戦史』一九七〇年七月
『先島群島作戦「宮古島篇」』一九七五年九月

一九七八年八月初版　定価　一、五〇〇円
編者　瀬名波　栄
発行所　沖縄戦史刊行会
〒900　那覇市松山二―三―六
ペイントビル二階（春秋社内）
電話（〇九八八）六八―八一四五番

印刷製本　印刷センター　大永
〒902　那覇市安里四四三番地の二
電話（〇九八八）三三―五一一一―三

正誤表

一、綴じ込み付図（写真）五枚目
（写真説明）四列目左より3人目苗代参謀の次に第24師団参謀杉森貫少佐を追加

一、本文三ページ
（写真説明）前列右から末谷少佐・都留少佐の次に小沢（長二）主計中佐を入れる。

一、本文十五ページ
（見出し）十・翌騒や十・十空襲に訂正。

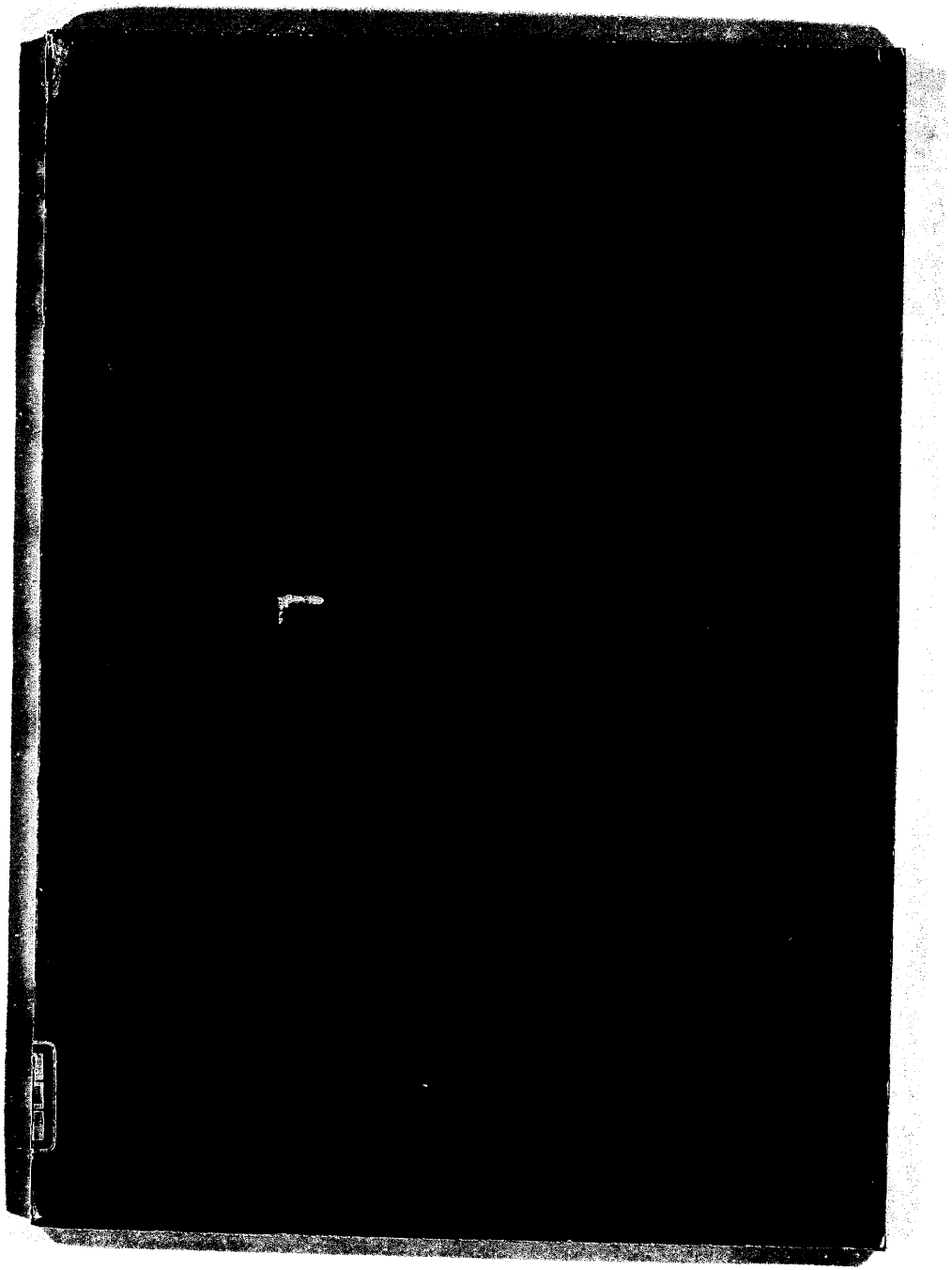
一、本文四十九ページ
（写真説明）仏印派遣参謀長当時の長勇少将は参謀副長当時に訂正。

一、本文八十四ページ
独混64旅司・中溝中佐の軍歴・南支派遣歩兵第一二四聯隊大隊長に訂正。

追記

一、本文四十五ページ・第六十二師団の項に左記を追加。

師団司令部主要陣容

参謀長	大佐	上野貞臣（30）
作戦主任参謀	中佐	北島之等之（39）
後方主任参謀	少佐	楠瀬梟師（43）
高級副官	中佐	原　研介（38）
次級副官	大尉	沼波　実（特8）
兵器部長代理	少佐	久住竹治（少10）
経理部長代理	少佐	藤原貫二
軍医部長代理	医中佐	福田　純
獣医部長代理	獣少佐	吉田懲男

不許複製転載
本誌収録の日本軍関係人物写真は本誌独占につき無断転載又は複製は厳禁する。